

平成 28 年 4 月 17 日

南の風 180

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

3の「自分で決める自由」についてです。

大塚氏は、子どもは親の「モノ」ではないと言います。親が子どもや学生の頃、やっていたスポーツを自分の子どもにもやらせたい、あるいは叶わなかった自分の夢を子どもにたくしたいという気持ちを持つことがあります。しかし、子どもはあくまでも、一人の独立した人格です。親の押し付けや、身代わりにするようなことがあってはならないのです。その子にとって、将来の可能性を奪うことにも成りかねません。すべての子どもに「自分で決める自由」があります。

4の「才能を伸ばす自由」についてです。親は誰でも、自分の子どもの才能を伸ばしてあげたいと思っています。スポーツを指導するコーチにも言えます。しかし子どもの才能は、親やコーチが思い描く才能の枠に収まらないものかもしれません。

以下大塚氏の引用です。「〇〇君はドリブルがうまい」「〇〇君はリフティングが100回できるんだって」ライバル心は競技力の向上に時として重要ですが、親から「他人と比べられる」のは子どもにとって何よりつらいことです。何にでも“平均”や“人並み”を求めるのが世の中の流れですが、サッカーではこうした平均に左右されない評価がプレーの“違い”を生みます。

すべての子どもたちには個性や能力を探求し、自分の「才能を伸ばす自由」があります。他人と比べること、画一的な物の見方で選手を評価、指導することは、選手自らが才能を伸ばすチャンスを奪うことになるのです。

以上です。

最後の「失敗する自由」についてです。皆さんもお分かりのように、子どもたちは成長の過程でミスをしながら学んでいきます。(我々コーチにも言えます)しかしともすると、周りの大人(コーチ)がミスを許さない環境をつくってしまうことがあります。「また同じことをしている」「何回も同じことを言わせるな」などと叱ることがあります。こういったことが重なると、子どもたちのプレーは委縮し、創造性を奪い、チャレンジする心を奪います。

ミスを怖がらずに果敢に挑む姿勢を生むのは、「ミスをする自由」のある環境です。と大塚氏は言います。

ここまで大塚氏の言う、5つの自由について書きました。

ミニバスに当てはめて考えてみます。バスケットボールに初めて取り組む子どもたちの場合、「自由」とばかりは言ってもらえません。基本を順序よく学ばせ、身に付くまで根気強く指導することはコーチの大きな役目です。「自由」と「放任」「無秩序」はまったく違うのです。

そして「自由」には「責任」が伴うこと、チャレンジにはリスクがあることもバスケットボールを通して指導する必要があります。

「5つの自由」は、我々バスケットボールの指導者にも多くの示唆を与えてくれます。明日からの指導に活かせるものが数多くありました。